

「高等教育の可能性と課題」を考える*

谷口照三

はじめに

本稿の目的は、「世界への愛とプロセス哲学」を文脈とし、20数年前から俄かに慌ただしくなった高等教育改革について批判的に検討し、「21世紀を生きるための一つの洞察」として、21世紀における高等教育の可能性と課題を展望することである。

キーワード：「世界への愛」とプロセス哲学、液状化する近代、リスク社会、協働化社会、高等教育改革

*本稿は、2014年10月11日から12日に桃山学院大学で開催された日本ホワイトヘッド・プロセス学会第36回全国大会のオープニングとして企画された公開シンポジウム「『世界への愛』とプロセス哲学——21世紀を生きるための洞察——」での筆者の報告草稿を若干修正、加筆したものである。また、本稿は、2012年度桃山学院大学総合研究所共同研究プロジェクト「『建学の精神』の哲学的・神学的再考——『生きること』の意味とサービス概念に関連づけて——」（11共214）の研究成果の一部である。筆者は、本プロジェクトにおいて、本年（2014年）が桃山学院創設130周年、桃山学院大学創設55周年、桃山学院大学キリスト教学会創設50周年に当たるため、筆者が所属している上記学会の大会を誘致し、公開シンポジウムの開催を提案した。かかるテーマは、「建学の精神」に関連づけ、設定したものである。なお、本稿は、かかるプロジェクトの成果報告書である拙稿「現代社会の問題状況と高等教育改革への洞察——『世界への愛』とプロセス哲学を視座として——」（『桃山学院大学総合研究所紀要』第40巻第3号、2014年3月刊行）の下になった草稿を約二分の一に再編成したものである。

かかる教育改革は、今日の国際情勢や社会の動向に鑑み、それに適合する人材、とりわけ「生きる力」の養成を目指し、構想され、実施されている。「社会の動向」への適合性や「生きること」に結びつけた教育改革自体には、異論はない。問題は、改革の基盤となる「社会」や「生きること」をどのような立場で、どのように理解しているか、またそれらについての将来への洞察はどのようなものであるか、という点である。私は、現時点でこれらの点について、広く理解を得る十分な内容が示されているとは思っていない。

「生きること」や「社会」をよりよく理解するために、「世界への愛」という視座、およびそれに広がりと思われA・N・ホワイトヘッドのプロセス哲学から、「21世紀を生きるための一つの洞察」として、この報告を試みてみたいと思う。

Ⅰ. 最近の社会問題が示唆すること

最近報道される社会問題は、いずれも、「社会」や「生きること」に関して再考する機会を与えてくれるように思われる。ここでは、数年来たびたび起きている「食」をめぐる問題を取り上げ、かかる「再考」の契機としてみたい。昨年私が本学の広報誌『アンデレクロス』(No. 154 2013 Winter)の特集「食について考える」に寄稿した小文『『食材』の偽装の問題』を引用することから、始めてみたい。それは、この問題に関する私のコメントである。

「食べることは、他の生命の『略奪』である。それ故に、『生かされている』ことに感謝する必要がある。ここに、道徳的、倫理的な基盤がある。今回の『食材偽装』は、この共通基盤への裏切りであり、冒瀆である。

それはなぜ起きたのか。組織による『費用の削減圧力』が働いていなかったかどうか。また、『プロフェッショナル意識』が上滑りし、『メニューと異なる食材でも顧客にはわからない』、という意識がなかったかどうか。よく考えてみる必要があるようである。『アマチュア』は、本来『愛する人』である。『食』に係わる『プロフェッショナル』は、『食』を『愛する人』でもあり、上述の『共

通基盤』の上に立つ人でもある。真の『プロフェッショナル』であれば、『費用の削減圧力』との間で、葛藤を抱え、悪戦苦闘したのであろう。だが、『プロ』と『素人であるアマ』を区別し、『わからないであろう』と『費用の削減圧力』との折り合いを付けた。これが今回の『偽装』事件の真相であろう。

事態の改善には、まず何よりも、『組織の圧力』を排除し、『真のプロフェッショナルとは何か』、および『我々の使命は何か』を巡る、現場の人々の自由な議論が必要であろう。そして、経営者は、その結果を核として組織自体の『使命』を再構築し、内外に表明し、共感を呼び込むように創造的なリーダーシップを発揮する必要がある。」

我々は、「生きる」ために食料を必要とする。それはあまりにも当然のことであるが故に、我々は、それが「他の生命の略奪」であることに、日常的には注意を向けていない。「食」をめぐる最近の問題は、どのような立場であっても、このことに対する「我々の自覚」を促しているように思われる。このことや先の「食材の偽装問題」に関するコメントは、ホワイトヘッドの所説に依拠している¹⁾。彼は、環境との相互作用をその存在の契機としている人間が「生きるということ」は「略奪という形態をとる」、と言う。かかる「略奪」は「生きること」において避けることができない負の側面であるが故に、我々はそれに真摯に向き合う必要があろう。それは、ホワイトヘッドの表現を借りるならば、「生命と共に道徳が重大にな」り、「その略奪は正当化を必要としている」と言い換えることが出来る。「道徳の重大性」は、「生かされていること」への覚醒に基礎づけられる「感謝」や「配慮」の必要性を要請しよう。また、「正当化の必要性」は、「生命」を維持し、「よりよく生きていく」ことを重大化するであろう。かかる「感謝や配慮の必要性」、「よりよく生きていくことの重大化」は、人間と環境との「相互作用による新たな所産」に他ならないのであり、さらに「新たな意味、意義」が付加されたそれらの「新た

1) Cf., Alfred North Whitehead, *Process and Reality: An Essay in Cosmology*, Macmillan, 1929. Free Press Paperback, 1969, pp. 124~125. 平林康之訳『過程と実在——コスモロジーへの試論——1』みすず書房、1981年、156頁、参照。

な相互作用」を漸進的に創造することへの契機となるであろう。

我々は、かような環境との関係を効果的に構築するために、「社会」を必要とする。それは、「よりよく生きる」ための「補完的機能」であり、歴史的に協働的（cooperative）な活動体としての専門的な諸組織や諸団体が形成され、複雑に発展してきた。このように、我々は、現在、極めて複雑な、二重の相互関係のなかで生きている。このように考えるならば、我々は、補完機能を果たす者、組織、団体も含め、かかる複雑な相互関係のなかに、先の「略奪の必然性」、「生命と道徳の重大性」、「正当化の不可避性」を位置づけ、それらに応答していく必要がある、と言わざるを得ないであろう。食事をする時、我々は、その食材となった「他の生命」のみならず、「食べること」を可能としてくれるあらゆる補完者（組織や団体も含む）に対し、「配慮」する必要がある。また、すべての補完者に関しても、それらは「略奪を補完している」が故に、このことと無縁であるはずがない、と言わざるを得ないであろう。かかる「補完者」は、自己の「仕事」をかかると関連づけ、それを意味づける必要があろう。

しかし、このような現代における複雑な相互関係、補完関係においては、その複雑さ故に、また現代社会の特徴、とりわけ経済的価値の優先性からくる種々の「圧力」から、「略奪の必然性」、「生命と道徳の重大性」、「正当化の不可避性」は、著しく見えにくくなっている。今回の「食材偽装問題」は、まさにそのことの表れの代表的な例であろう。そこには、複雑な相互関係、補完関係を理解するための枠組みが、それをプロセス哲学と言いたいのであるが、欠落しているように思われる。また、それ故に、そこに読み取れることは、「略奪の必然性」、「生命と道徳の重大性」、「正当化の不可避性」への眼差しであると思われる「世界への愛」の脆弱性である。この傾向は、この問題に限ったことではなく、あらゆる問題に見て取れるように思われる。とりわけ、筆者が現在危惧せざるを得ないのは、高等教育改革の問題である。現在進行中の高等教育改革においては、それを基礎づけ、方向づける役割を果たすはずの「現代社会ないし世界の理解」が表層的で、複雑な相互関係や補

完関係を解釈するプロセス哲学的視座が欠落し、またそれ故に「改革」の内容を性格づけるためには欠かせない眼差しである「世界への愛」が脆弱である点を、「食材偽装問題」と同様に読み取らざるを得ない。本稿においては、この点を確認した上で、また、「食材偽装問題」の「改善」に関して述べた内容と同様な性質に沿った洞察をもって、21世紀の高等教育の可能性と課題を考えてみたいと思う。

Ⅱ. 「世界への愛とプロセス哲学」という視座

「世界への愛」の着想は、中山 元著『ハンナ・アレント〈世界への愛〉——その思想と生涯——』（新曜社、2013年）によるところが多いが、基本的には本務校である桃山学院大学の「建学の精神」にある。本学は、聖公会、つまり英国国教会系のミッションスクールであり、クリスチャン・ネームは St. Andrew's University である。その「建学の精神」は「キリスト教精神」であり、「理念的教育目標」はそれに基づき「世界の市民」を養成することである。クリスチャン・ネームに表わされている聖アンデレは、周知のようにイエス・キリストの最初の弟子である。彼は、厳しい迫害を受けながらも、イエスの教えを守り「自由と愛の精神」を貫いた人であった。したがって、本学において「キリスト教精神」とは「自由と愛の精神」を意味する²⁾。

筆者は、かつてこの「建学の精神」を『『世界の市民』パラダイムの可能性』のテーマの下に、その解釈と応用について論究し、その結言で以下のようにまとめた³⁾。「本稿において、桃山学院大学の『建学の精神』や『教育理念』が真に組織的な『英知』となり、『生きること』へと向けられた教育や研究活動が立ちあがってくる『知的枠組み』となることを願い、『自由と愛の精神』にもとづく世界の市民』の意味内容を解釈してきた。『生きること』とは、『

2) <http://www.andrew.ac.jp/info/ideology.html> を参照されたい。

3) 谷口照三稿「『世界の市民』パラダイムの可能性——桃山学院大学の『建学の精神』の解釈と応用——」『キリスト教論集』（桃山学院大学）第42号、2006年3月。

答可能性を拓くこと』である。『応答可能性を拓くこと』とは、『信念に対する責任』を契機とする『レスポンスビリティ・スパイラルを生きることを習慣化すること』である。このような『習慣化』を促進する契機となるのは、『協働』、つまり共に働いていく仕組みやパートナーシップ等についての理解と実践である。したがって、『世界の市民』とは、これらの結合を可能とする存在である」。かかる結論は、「高等教育の可能性と課題」を考えるためにも有効である。しかし、その有効性を高めるためには、「世界」及び「自由と愛」の意味とその捉え方をより深める必要がある、と常々考えていた。この度、先の『ハンナ・アレント〈世界への愛〉——その思想と生涯——』に触発され、改めて、「世界への愛」とプロセス哲学という視座からその課題に挑戦しようと思った次第である。

「自由と愛」の「愛」は、筆者の解釈によれば、「応答すること」の可能性を拓く「能力」を培う礎である。それは、他の生命や環境も含めた広い意味での「他者」への「配慮」や「気遣い」である、と言い換えてもよい。今年の3月、東日本大震災・津波の被災地である岩手県の大船渡を訪問した際、新約聖書のうちの四つの福音書を地元の言葉で翻訳された山浦玄嗣医師にお会いし、「愛」を「大切にする、大事にする」と訳されていることを知り⁴⁾、上述のような解釈に確信が持てた。また、エーリッヒ・フロム (Erich Fromm) は、「愛」とは、「配慮」、「責任」、「尊重」、「理解 (知)」という能動的性質を持つ、と指摘している⁵⁾。ここでの「責任」は、他の概念との関連性を考えた場合、「応答可能性」と表現した方が論理的な整合性をもつように

4) 山浦玄嗣訳『ケセン語訳新約聖書【マタイによる福音書】』イー・ピックス大船渡印刷出版部、2002年、同訳『ケセン語訳新約聖書【マルコによる福音書】』、2003年、同訳『ケセン語訳新約聖書【ルカによる福音書】』、2003年、同訳『ケセン語訳新約聖書【ヨハネによる福音書】』、2004年、同著『ふるさとのイエス——ケセン語訳聖書から見えてきたもの——』、2003年、参照。

5) エーリッヒ・フロム著、鈴木 晶訳『新訳版 愛するということ』紀伊國屋書店、1991年、48頁、95頁、参照。

思われる。このような理解は、「愛」の一面である「自己本位性」を排除する試みでもあろう。山浦医師の意図もそこにあるように推察する。

以上のような「愛」の捉え方は、新約聖書「マタイによる福音書」の以下のようなイエスの言葉⁶⁾を「世界への愛」の下に解釈することを助けてくれる。それらの最初の言葉は、あの有名な「敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい」、である。それは、山村医師が「愛する」を「大切にする」へと捉えなおした契機となった言葉でもある。他の二つは、「どの掟が最も重要か」という律法者の問いに関する言葉であり、一つの掟は「心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くしてあなたの神である主（しゅ）を愛しなさい」、である。そして、それと同等の重要性を持つ「隣人を自分のように愛しなさい」が挙げられている。これらの言葉は、「神」をどのように捉えるかはなお課題として残るが、現代の文脈を考慮するならば、次のように敷衍的に解釈することも出来よう。「愛」、つまり「配慮」・「気遣い」をもってよく「理解」し、そのことを通して「尊重」し、そして「応答可能性」を拓いていく、その対象は、とりあえず、われわれが生きていく、いわゆる環境世界である大地、他の生命などを含めた広い意味での「他者」と考えられる。

しかし、かかる「世界」は、「愛」、「配慮」などの単なる「対象」に止まるものではない。この点の説明の補足は、森 一郎が『死を超えるもの——3/11以後の哲学の可能性——』でうまく表現しているので、それを引用したい⁷⁾。「『世界』とは、世界内存在するこの私の住み処であると同時に、作り出され使い続けられる物たちの事物世界であり、かつ死すべき生れ出ざる者たちの共同世界である。事物世界と共同世界を織り込んで成り立っている、この私の世界は、私が生れ落ちるずっと前から、この地上に存在し続けてきたし、しばしの滞在ののち私が立ち去っても、しぶとく存立し続けるであろう。命を超えて存続する地平全体、それが世界なのである」。かかる「世界」と「世

6) NKJ/新共同訳『新約聖書』、マタイによる福音書5-44, 22-37, 22-39。

7) 森 一郎著『死を超えるもの——3/11以後の哲学の可能性——』東京大学出版会、2013年、64～65頁、参照。

代間倫理」を結びつけ、森は、「世界への愛」を語る。「そして、この連繋に芽生える、事象性を含んだ世代間倫理を著わす言葉こそ、『世界への愛』にはかならない」。さらに彼は、「世界への愛」という言葉が醸し出すある種の危険性を想起するように、手堅く説明している。「死すべき者たちが、いのちを超えたものに思いを寄せ、それを大切にすることは、滅私奉公でもなく悪しき物象化でもなく、世界内存在する自己自身をその本来性において具現させることである。それは、自己への愛であると同時に、世界への愛である」。

我々は、生きるために、「食料」を取り入れ、「生命」を繋ぐことによって、「新しさ」を創出するのみではなく、「道徳」や「正当化」の必要性に対しての応答として「よりよく生きること」を志向しなければならない。そこでは、単なる生命の維持に加え、「意味の刷り込み」が行われる、と言ってよい。そのような交互作用において「世界」が形成される。かかる「世界の形成」に係る「環境への働きかけ」は、ホワイトヘッド的に捉えるならば、「生きること」から「よく生きること」へ、そして「よく生きること」から「よりよく生きること」へ、さらに「よりよく生きること」からスパイラル・アップした次の段階の「生きること」へと上向きの循環プロセスを形成するように、生きることを意味しよう。ホワイトヘッドは、それを「三重の衝動」に基づく「生命の技巧」と呼ぶ⁸⁾。「生命の技巧」は、まさに「世界」への「意味の刷り込み」でもある。またそれは、他者との相互内在的な「意味の刷り込み」の歴史である過去への省察と未来に対する洞察を通し「いま・ここ」である現在をいかに生きるか、という決断を伴わざるを得ないであろう。「生命の技巧の増進」は、「三重の衝動」を契機とする。ホワイトヘッドはその方向性を「理性の機能」に求め、「<理性>とは、事実においてではなく、想像力において認められる目標達成に向けての強い衝動をみずから指揮し、さらにそれを批判するところの、経験にふくまれる要因である」と定義している⁹⁾。ここでの「理性」は、

8) Cf., Whitehead, *The Function of Reason*, Princeton University Press, 1929.

p. 8. ホワイトヘッド著作集第8巻『理性の機能・象徴作用』, 11-12頁, 参照。

9) Ditto, 上掲訳書, 12頁。

一般に理解されている意味とは異なる。筆者は、混乱を避けるために、それを「英知」(wisdom) と言い換えた方がよいと思う。かかる「英知」による「生命の技巧」は、「生きることの上向きの循環過程」の「舵取り」、つまりライフ・ガバナンスである。

「世界への愛」の具現化プロセスとしての「生きることの上向きの循環プロセス」は、「応答可能性を拓く」プロセスである。このような意味での「応答可能性」は、いわゆる責任概念を一般化したもの、と言えよう。「責任」は、英語では Responsibility であるが、その直訳は「応答可能性」である。筆者は、それを(広い意味での)「信念」(belief) から「感受性」(sensitivity) へ、「感受性」から「応答能力」(capability of response) へ、そして「応答能力」から再び「信念」への三つのミクロのプロセスのサイクルと捉えている¹⁰⁾。それぞれのミクロ・プロセスは、それぞれ「想像性」(imagination), 「創造性」(creativity), 「自己超越性」(self-transcendence) を契機として始動する。つまり、応答可能性とは、まずは、「想像的に何かを感受することによって意味を満たすこと」(信念→感受性), 「創造的に何かを形にすることによって意味を満たすこと」(感受性→応答能力), 「自己超越的に自己を批判および評価し、信念に対して一定の態度を形成することによって意味を満たすこと」(応答能力→信念)を内包したサイクルである。最後のミクロ・プロセスは、他のミクロ・プロセスをも含め、「信念」を「批判・評価」する意味において、極めて重要な役割を担う。かかるプロセスが契機となり、「応答可能性」は、スパイラル・アップし、三つのミクロ・プロセスを含みながら上向きの循環プロセスというマクロ・プロセスを形成する。

このようなサイクルとプロセスは、幅広い、多様な「協働」を基盤とする。生きていく為には「環境への働きかけ」を必要とするけれど、我々は脆弱性や能力の限界から完全に自由ではあり得ないが故に、そこに「協働」が必要

10) 谷口照三稿「『責任経営の学』としての経営学への視座——経営学の組織倫理学の転回——」『環太平洋圏経営研究』(桃山学院大学)第10号, 2009年11月, 参照。

とされる。応答可能性のサイクルのあらゆる局面に、つまり「信念」の形成にも、「感受性」の涵養にも、「応答能力」の育成にも、さらには「想像性」、「創造性」、「自己超越性」に至るまで、「協働」が一定の文脈を与えている。三つのマイクロ・プロセスからなる「応答可能性」のサイクルは、一定の「協働」の成果でもある。一方、スパイラル・アップしたマクロ・プロセスは、新たな（継続も含む）「協働」によって「応答可能性」を拓くプロセスである。その契機となるものは、「自己超越性」である。この具体的な働きには、アカウンタビリティ（accountability）、いわゆる説明責任を含む。なぜならば、応答可能性を拓く、生きるプロセスは、自己と他者との相互浸透性から成り立っているが故に、自己の立場をオープンにし、他者に対して「批判可能性」を提示しなければならないからである。また、有効な協働を確保するためにも、それは必要となろう。それは、ライフ・ガバナンスである「英知」を伴った「生命の技巧」を培う「経験」でもある。「生命の技巧」は、「応答可能性」のサイクルのあらゆる局面に働く必要があるが、とりわけスパイラル・アップの契機としてのそれが重要であろう。

Ⅲ. 現代社会と高等教育改革に係る問題性と将来への洞察

社会の発展とは何か。筆者は、かかる問いに対して、それは、対立も内包するけれども、上述した各自の「応答可能性を拓くプロセス」をサポートする各種の協働関係の進展である、と応えたい。かかる協働関係は、「個人、家族、地域社会」からなる非公式的なパートナーシップから公式的な諸制度の中の専門的な諸組織や団体に及ぶであろう。「社会」とは、このような二重性をもつ、と考えられる。社会学者ジグムント・バウマン（Zygmunt Bauman）に倣って、前者の協働関係を「ソーシャルな状況」（the social）と、後者のそれを「ソシエタルな状況」（the societal）と捉えることも出来る¹¹⁾。「ソーシャルな状況」とは、

11) Cf., Zygmunt Bauman, *Modernity and the Holocaust*, Polity Press, 1989. ↗

非公式的で、人格的な相互関係であり、「個人、家族、地域社会」における生活の原初的な状況を意味する。「ソシエタルな状況」とは、「政治」や「市場」に関する諸組織体における公式的な役割関係、契約関係である。本稿においては、それぞれ「市民的公共圏」、「役割分担社会」と表現しておきたい。

ここでまず確認しておきたい点は、原理的に、「市民的公共圏」から「役割分担社会」が派生し、それらの間で補完関係が成立するという点である。ただ留意しなければならない点は、基本的には「役割分担社会」が「市民的公共圏」を補完するという点である。しかしながら、「役割分担社会」がその補完機能を果たすためには、「市民的公共圏」で生きる人々が「役割分担社会」を構成する種々の協働システムや組織の構成メンバーとして特定の役割を担うことが必要となる。ここに、「補完関係のパラドックス」が存在する。この点に、社会、特に現代社会を巡る根本的な問題が存在する。さらに、それと共に焦点を当てるべきなのは、「政治」や「市場」に係る「役割分担社会」が真に、また十分に「家族・個人」および「コミュニティ」、つまり「市民的公共圏」を補完し得ているかどうか、という論点である。

現実はどうか。「市民的公共圏」と「役割分担社会」、「ソーシャルな状況」と「ソシエタルな状況」の重層的な補完関係が正しく理解されているかどうか。これらの関係は、正しく機能するならば、スパイラル・アップした上向きの循環プロセスを形作るように思われるが、現実における志向は片方向の補完関係が固定化される傾向が強いのではないかと思われる。とりわけ、近代の工業化の時代にあっては、「家族・個人」および「コミュニティ」などの「市民的公共圏」への「役割分担社会」の本来の補完関係が理念化され、かつ「先送り」され、前者の後者への補完関係が強調され、一般化される傾向が強まり、逆転した補完関係が出来上がっているのではないか、と思わざるを得ないところがある。それは、「ソーシャルな状況」よりも「ソシエタルな状況」

↘ p. 179. ジークムント・バウマン著、森田典正訳『近代とホロコースト』大月書店、2006年、233頁、参照。

において「社会」が認識され、「役割分担社会」のなかに「市民的公共圏」がからめ捕られていることを意味しないであろうか。そこでは、「役割分担社会」そのものがいわゆる「社会」である¹²⁾。これこそ、最大の「具体性の置き違い」であろう。

さらに、かかる補完関係をさらに複雑にしているのは、現代社会が抱える問題状況であろう。その一つである、ジグムント・バウマンが言う「液化化する近代」は、「そこで生きる人々の行為が、一定の習慣やルーチンへと〔あたかも液体が個体へと〕凝固するより先に、その行為の条件の方が変わってしまうような社会」¹³⁾ 状況であり、それに自由に適応することが諸個人に求められ、またその結果には自己責任が問われ、それに応答することによって個人はアイデンティティを自ら獲得していかなければならない¹⁴⁾。さらに、工業化と高度工業化がもたらす自然環境や健康への被害、および将来的なそれらの可能性が埋め込まれた社会をウルリヒ・ベック (Ulrich Beck) は、「リスク社会」と呼んでいる¹⁵⁾。「液化化する近代」と「リスク社会」は、相互に他の原因となり、現代社会の問題状況を深刻なものにしている。ここに、我々は、

12) 「社会人」や「社会人力」の「奇妙さ」は、おそらくここに由来するのではなかろうか。

13) Bauman, *Liquid Life*, Polity Press, 2005, p. 1. ジグムント・バウマン著、長谷川啓介訳『リキッド・ライフ——現代における生の諸相——』大月書店、2008年、7頁。

14) Cf., Bauman, *Liquid Modernity*, Polity Press, 2000. ジグムント・バウマン著、森田典正訳『リキッド・モダニティ——液化化する社会——』大月書店、2001年、参照。

15) Cf., Ulrich Beck, *Risikogesellschaft: Auf dem Weg in eine andere Moderne*, Suhrkamp Verlag, 1986. ウルリヒ・ベック著、東廉・伊藤美登里訳『危険社会——新しい近代への道——』法政大学出版局、1998年、参照。Cf., Beck, *World Risk Society*, Polity Press, 1999. ウルリヒ・ベック著、山本啓訳『世界リスク社会』法政大学出版会、2014年、参照。Cf., Beck, *World at Risk*, Polity Press, 2009.

「手に負えない状況に陥る」前に、それらの必然性と共にその問題性をしっかりと受け止め、改善の方向をとれるように、思考と行動を導く「内省的近代化 (reflexive modernization)」に向けて歩む必要を感じないわけにはいかない¹⁶⁾。

「液状化する近代」は、自由な選択が権利でもあり、また義務でもあり、その結果に対する自己責任原則が強調されることにより、「個人化社会」へと繋がっていかざるを得ないであろう。そこでの個人の生活は、「液状化する生活」(liquid life)となり、それは、「不安定な生活であり、たえまない不確実の生の中で生きること」になる¹⁷⁾。それ故に、それ自体がリスク化することとなる。「リスク社会」は、工業化、高度工業化の進展によるものに加え、このような「個人化社会」のそれも加わるが故に、真に強力な「協働化社会」を必要とするであろう。したがって、個々人のボランティアや中間組織である「市民的社会組織」(Civil Society Organization; CSO)にとどまる「協働革命」のみでは、「内省的近代化」の深化は望めない。そのためには、本格的な社会における「補完関係」の再構築を志向していく必要がある。ここで、「市民的社会組織」について言及しておきたい。「市民的社会組織」は、NPO および NGO などのボランティア組織を意味しており、特にヨーロッパで使用されている言葉である。それは、基本的には「市民的公共圏」に属するが、「役割分担社会」の性質をも持っていることも指摘しておきたい。今日においては、「市民的社会組織」には、「市民的公共圏」と「役割分担社会」との補完関係を正常化するための連結機能が期待されている。

さて、今日の高等教育の改革は、このような問題状況への「応答可能性を拓く」、ということであろう。しかし、問題は、その背景となる現代社会の特徴のどこを見ているのか、またそのことと人々が生きる「応答可能性を拓く

16) ベック、『危険社会』、13-14頁、317-331頁、参照。Cf., Beck, *World Risk Society*, pp. 79-81. ベック、『世界リスク社会』、135-139頁、参照。Cf., Beck, *World at Risk*, p. 55, pp. 119-120.

17) Bauman, *Liquid Life*. p. 2. 上掲訳書、8頁。

プロセス」をどのように位置づけているのか、と真摯に問い続けているかどうか、ではなからうか。

高等教育改革¹⁸⁾のエポックは、何と言っても、1991年の「大学設置基準の大綱化」である。そこでの中心的論点は、「一般教育と専門教育の区分の廃止」、「一般教育の科目区分の廃止」、「カリキュラムの自由化」であった。それは刺激的であった。しかし、その結果は、もちろん我々の力量不足を認めざるを得ないが、期待外れであった。そこでは、一般教育課程、教養部の改組転換、および「専門教育の事実上の一般教育化」を通じ、「専門教育の空洞化」¹⁹⁾や「大学の中核をなす教養の批判的な力そのものの解体」²⁰⁾が進行していった。

しかし、それらは、1990年代以降、日本経済社会の構造変動や不況の広がり、また経済・情報・知識のグローバル化の急激な進展による知識経済化の状況の中で、日本の、また日本の企業の国際競争力を如何につけていくか、という問題と無関係ではなく、連動しているように思われる。そこでは、まさに、日本の、また日本の企業の「生き残り」、「生きる力」が焦眉の急となったのである。そのために、科学技術研究も含めた高度な専門職業能力は大学院が担い、そして学部教育では「学士力」と表した「新しい教養」が教育課題として位置づけられることになった。「学士力」は、2008年12月の中央教育審議会答申「学士課程教育の構築に向けて」において取り上げられたが、2012年の答申「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～」において、以下のように敷衍されている。第一点、「知識や技能を活用して複雑な事柄を問題として理解し、答えのない問題に解を見出していくための批判的、合理的な思考力をはじめ

18) 高等教育改革に関する答申は、以下を参照。

http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/index.htm

http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/015/index.html

19) 岩崎 稔・大内裕和・西山雄二稿「討論 大学の未来のために」『現代思想』（特集 大学の未来）第37巻第14号、2009年11月、青土社。大内裕和の発言。

20) 上掲稿、西山雄二の発言。

とする認知的能力」、第二点、「人間としての自らの責務を果たし、他者に配慮しながらチームワークやリーダーシップを発揮して社会的責任を担い、倫理的、社会的能力」、第三点、「総合的かつ持続的な学修経験に基づく創造力と構想力」、第四点、「想定外の困難に際して適格な判断をするための基盤となる教養、知識、経験」。これ自体は、幅広く、包括的で、申し分ないように思えるが、かなり高度なことを学生に要請しているようにも思われる。むしろ、これらは、今の経営者や職業人に対して求めるべきなのではなかろうか。そうではなく、高等教育に期待しなければならないのは、上述した今日的情勢の中では企業の内部でかかる人材養成は負担が大きくなり、かつそのことがリスク化し、企業の「生きる力」を削ぐことになるからではないか、と考えてしまう。

かかる「質的転換」とは、「社会に役立つ」ことへの「転換」であることは間違いないであろう。問題は、そこでの「社会」は何を意味しているか、である。明らかに、それは、すでに言及した「the societal」な「役割分担社会」での「政治」が「市場」をサポートする、いわば「経済社会」、あるいは答申にたびたび出てくる「社会経済構造」を意味していると思われる。そのことは、「役立つ」とは「競争上の有利さ」をもつことを同時に意味しよう。そのためにも、「社会」として「役立つ教育」のために「経済的基盤」を用意する必要がある。しかしながら、その「用意」は、「競争上」の観点からも「効率的に」実行する必要がある、そこで経営戦略的手法、つまり限られた資源を効率的に使用するための「選択と集中」が援用される。それを実行可能にするために、各大学に対して「質保障」を担保するための制度的改革と教育方法の改善が求められることとなる。前者が教育実践の「自己点検・評価」と第三者評価を核とする評価システムの構築、後者が「アクティブ・ラーニング」と「プロブレム・ベースド・ラーニング」(PBL)などの導入である。「質保障」の二つの側面それぞれ自体は、おそらく必要であろう。問題は、どのような文脈で、またどのような内容で行われるか、である。特定の文脈や内容のみでは、またその説明が省略される場合、むしろ弊害の発生可能性が広がるかもしれない

い。答申で言及されている「新しい教養」や「新しい能力」は、そもそも「汎用的」な性質をもっている。それは、「脱文脈」、つまり文脈から切り離されていることを意味し、限りなくパッケージ化され、マニュアル化される²¹⁾。しかしながら、それは、現実の特殊具体的な状況とうまく接合できるであろうか。

答申では、たびたび「有為な人材の育成が重要」という根拠として「予測困難な時代であるから」という表現や、また「どんな社会になろうとも力を発揮できる人材を」という意味の発言が出てくるが、この点にはやや違和感を覚えざるを得ない。少なくとも、想像力を働かせるならば、現代社会は、これまで見てきましたように、一方では「液状化する近代」、他方では「リスク社会」の状況を呈していることは、推測できるのではなからうか。「新しい教養」や「新しい能力」は、ジグムント・バウマンのいう、あらゆるものが軽くなり、移動を柔軟に成し得る「液状化する近代」において、提起されたと言ってよいと思う。それは、「システム [社会] の矛盾を個々人の人生において解決していく」²²⁾「個人化社会」でもある。「液状化する近代」を「液状化する社会」と言い換えてもよいと思うが、彼は、そのような社会「であるいま、垣塙に投げ込まれ、溶かされかけているのは、集団的な事業や集団的な行動において、かつて、個人個人それぞれの選択を結んでいたつながりである——個人的生活と、集団的政治行動をつなぐ関係と絆である」²³⁾、と述べている。中央教育審議会の答申では、「配慮」や「チームワーク」の必要性に言及しているが、それは「流動化する社会」や「個人化社会」を想定するならば、継続的なものではなく、仕事が続いている限りの、時間的に限定された限りのものであり、真に相互に配慮し合う絆を伴った継続的な「協働」ではないの

21) 松下佳代編著『<新しい能力>は教育を変えるか——学力・リテラシー・コンピテンシー——』ミネルヴァ書房、2010年、参照。

22) Bauman, *The Individualized Society*, Polity Press, 2001, p. 47. ジグムント・バウマン著、澤井 敦/菅野博史/鈴木智之訳『個人化社会』青弓社、2008年、68頁。これは、バックからの引用。

23) Bauman, *Liquid Modernity*, p. 6. 訳書、9頁。

ではなかろうか。先に述べたように、「リスク社会」に加え「液状化する社会」それ自体がリスク化し、それ故に「協働化社会」への期待が広がる状況において、「協働の芽」が踏みつぶされている、とパウマンは言っているのである。そのような状況を前にして、単に「チームワーク」の必要性を述べているだけでよいのであろうか。今日においては、根本的に「新しい、広がりのある効果的な協働」を育てることへの洞察を必要としている、と言わざるを得ない。

「社会において有為な人材」を育てることを考え実践していくには、その「社会」を我々が生きていく「共通の世界」と捉え、その「世界への愛、配慮、気遣い」を基盤とし、そこから「世界への応答可能性を拓いていく」展望が欠かせないように思われる。つまり、我々が生きてきた「社会」の現実、その栄華と同時にその過酷さや問題性を受け止めた上で、未来を展望し、「今・ここに如何に生きるか」を共に問うことが、肝要なのではないであろうか。このように、「内省的近代化」を共に生きていくことが、我々「死に向けて生きていく者」の共通の課題とならなければならない。そこでは、その都度「真に価値ある」あるいは「目指すべき価値のある」社会とは何かが議論され、「仮説」として社会的モデルが案出され、その実現可能性が問われる必要がある。このプロセスが教育、とりわけ高等教育にとって重要な「文脈」を提供することとなり、またかかるプロセスに適切な形で関与していく必要があると思われる。ホワイトヘッドは、「教育全体が目指しているのは唯一の科目」であり、「それはいろいろな形であらわされてはいますが『生きるということ』」という、「この単一な統一体と結びつかないかぎり、…何の役にも立たないのです」²⁴⁾と述べているが、今こそこのことを真摯に問い直す必要がある。

ここで、かかる構想に沿い、「目指すべき価値ある社会」を一つの「仮説」として、提示してみたいと思う。まず、そのために、「哲学的批判性」に注目したい。それは、「プロセス哲学」の視座を表象するものである。ホワイトヘッ

24) ホワイトヘッドが1922年ロンドン師範学校協会で行った講演「教育のリズム」での発言。久保田信行訳『ホワイトヘッド教育論』法政大学出版局、1972年、10頁。

ドは、「われわれは信ずるが故に哲学する (philosophize) ののであって、哲学するが故に信ずるのではない」と断った上で、「哲学とは信念の批判である——つまり信念を保持し、深め、修正するのである」、と言っている²⁵⁾。「哲学的批判性」は、この言葉を参考にした、筆者の造語である。それは、すでに言及した継続的、正しくは漸進的に「応答可能性を拓く」ための、あるいは「リスポンシブル・スパイラル・プロセス」を「生きる」ための「特性」としての「自己超越性」を意味する。ここで、かかる「哲学的批判性」の「浅さと深み」を縦軸に、「世界への愛」の「狭さと広がり」を横軸に、また前者は人々の「凝集性」の「強さと弱さ」に、後者は「協働への自由度」の「弱さと強さ」にそれぞれ連動するものと考え、次頁の図のような「世界への愛とプロセス哲学」を視座とする「社会形態」分類を試みてみた。「凝集性」については、「一か所に凝り集まること」を意味するが、化学において「安定を失ったコロイドなどの粒子が寄り集まって塊になる現象」であることに留意し、判断した²⁶⁾。このような図式によって、四つの社会形態が分類されることになる。この図式から展望し得る「目指すべき価値ある社会」は、「I」の共同体 (community) と「IV」の個性化と協働化の相互媒介的な社会 (cooperative society) の補完関係をダイナミックに形成していく社会である。「I & IV」は、すでに言及した「市民的社会組織」の媒介などを通して、「役割分担社会」が「市民的公共圏」を補完するようにその関係を再構築した社会である。また、そこでは、「市民的公共圏」に属する人々が「役割分担社会」において「役割」を担うことが「市民的公共圏」を補完する、あるいはサポートすることに繋がっているという確信が持てる社会でもあろう。そのような社会は、差異の相互承認の下での効果的な協働が進展すること、つまり「個性化」と「協働化」のスパイラル・プロセスの形成が漸進的に起動していく枠組みとなろう。

高等教育改革は、「どのような社会になろうとも」ではなく、我々の「生き

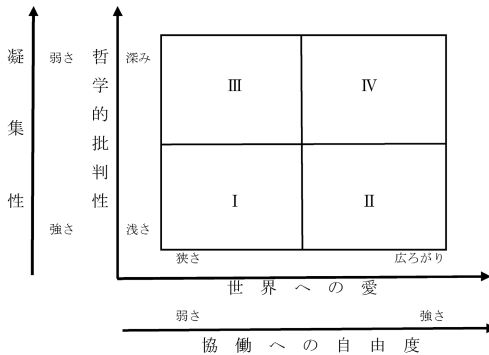
25) ホワイトヘッド、『理性の機能・象徴作用』, 174頁。

26) 『大辞林』三省堂, 1988年, 参照。

「高等教育の可能性と課題」を考える

ている世界」を通時的プロセスである「過去」と「未来」を接合する共時的プロセスの下に捉え、「どのような社会が価値ある社会か」を想像力をも動員して考え、共有化する営みを文脈とすることから、スタートすべきではなからうか。そのような下でのラーニングが、高等教育には求められなければならないし、また、そこからこそ、知識の活用に方向性を与える英知が培われる、と思われる。ホワイトヘッドが言うように「英知」は、ナレッジ・ガバナンスである²⁷⁾。これこそ重視されなければならない。さらに、留意すべきは、教育をこのような文脈、つまり「生きること」のプロセスに結び付けていくことは、固定的で、一様的では意味を失いかねない、という点である。ホワイトヘッドは、「教育のリズムとプロセス」に配慮し、それに適合的な形で、この連結を進めるように、提唱しているように思われる²⁸⁾。彼によれば、教育の

図 「世界への愛とプロセス哲学」を視座とする「社会形態」分類



- I ➡ 共同体 (community)
- II ➡ 福祉社会 (welfare society)
- III ➡ 個人化社会 (individualized society) および抑圧的社会 (repressive society)
- IV ➡ 個性化と協働化の相互媒介的な社会 (cooperative society)

出典：谷口照三稿「現代社会の問題状況と高等教育改革への洞察——『世界への愛』とプロセス哲学を視座として——」（『桃山学院大学総合研究所紀要』第40巻第3号、2015年3月刊行）、第6図を修正し、簡略化したものである。

27) ホワイトヘッド、『ホワイトヘッド教育論』、47頁、参照。

28) 上掲書、第二章、第三章を参照。

プロセスにはマクロのプロセスとして、「ロマンの段階」、「精緻化の段階」、「普遍化の段階」からなるが、それぞれの段階にミクロのプロセスとして三つの段階が「入れ子型」に組み込まれている。そこには「自由」から「訓練及び自己抑制」へ、そして再び「自由」へのリズム的な移行がある。マクロの最後の段階が高等教育に当たることは言うまでもないが、その後のプロセスもあることに留意しなければならない。それは、生涯教育の段階と考えるとよい。さらに、留意すべき点は、「ロマンの段階」、「精緻化の段階」、「普遍化の段階」に応じて、文脈や諸問題の濃淡、範囲、焦点の置き所が変化するということである。これを捉えそこなうならば、大きな混乱や弊害が発生する可能性が高まることになろう。最後に指摘しておきたいのは、今日注目を浴びている「アクティブ・ラーニング」や「PBL」は大変重要な教育方法であるが、あくまで「方法」にすぎないという点、さらにはそれらをどの段階に位置づけるのかを明示化することである。それによって、教育の、ラーニングの「内容」が異なってくるからである。また、どこに位置づけようと、その前後の段階での内容を用意したり、あるいは想定したりすることによって、リズムを作る、ことが肝要である。今日実践されている「アクティブ・ラーニング」や「PBL」は、そのことに配慮できているのであろうか。「リキッド・ラーニング」や「リキッド・スタディー」を避けるためにも、かような配慮を欠かすわけにはいかないであろう。

おわりに

筆者は、経営学を専攻しており、特にこれまで、「企業の社会的責任」、CSRに関心を持ち研究してきたが、それが真に定着化していくための環境を作る必要性を感じ、近年、「内省的近代化」の文脈の下でのCSRの研究と教育に重点を置いてきた。しかし、最近では、それに止まらず、高等教育という制度全体の中で、そのような文脈の下に教育を実践していくことがより根本的な問題である、と感じるようになってきた次第である。

「高等教育の可能性と課題」を考える

その歩みを先導してくれたのが、ホワイトヘッドのプロセス哲学であった。筆者がホワイトヘッドを正しく理解できているかどうかは、自信はあまりない。それは、語弊があるかもしれないが、私にとってそれほど重要ではない。間違った解釈が多くあるかもしれないが、筆者の思考領域の中にホワイトヘッドの論点を取り込み、自らの中において整合性をつけるように、苦闘しながら、取り組んできた。ホワイトヘッドの哲学は、ワインにとっての樽の、また思考上のマップの役割を、筆者に対して提供してくれたように思う。しかし、それだけではない。ホワイトヘッドの思考枠組みは、本稿で引用した他の人々の所説を適切にあるべきところに位置づけるマップの、またそれらの主張の意味を引き出す役割を果たしているように思われる。

最後に指摘したい点は、以下のことである。ホワイトヘッドの所説がなした、この役割は、実は、今日の「役割分担社会」を構成する各種の組織に対して、もちろん大学も含まれることは言うまでもないが、求められているのではないだろうか。

(完)

Rethinking Higher Education Reform

Teruso TANIGUCHI

This paper considers the “Amor Mundi and Process Philosophy”, as its context, critically reviews the higher education reform that has suddenly sped up over the past 20 years, and takes account of the possibilities and challenges to higher education as an insight into living in the 21st century.

The education reform has been made in view of international situations and today’s social trends, aimed, conceived and implemented at developing human resources to fit into it, especially cultivating a “zest for living”. I do not have any objection to the education reform, if it is related to compatibility toward social trends and life. The problems are how and from what position they understand “social” and “life”, which are the foundations of the reform. Also, what does insight into the future mean for them? Regarding these points, I currently do not think that the contents of the reform are insufficient to obtain a broad understanding. In the report regarding the reform, “difficult times to predict” is cited as the reason why development of effective human resources is important. And, the report emphasizes that human resources that can fully provide their ability are necessary in any society. I feel there is something wrong with this expression.

If we are considering and implementing the development of promising talent in society, the expression, “in any society” is not suitable. We should start from understanding the world where we are living using a synchronic

process, which connects two diachronic processes, “past” and “future”, imagining what kind of society would be ideal, and encouraging acts of sharing. In other words, it is essential that we accept the reality, not only the glory of society, but also its rigors and problems, while we view the future and ask “how and why we live here now”. Here, “Amor Mundi” is the foundation. The “Amor Mundi” relates to our current views toward the past and future of our communities and the world woven by “things” including natural and artificial things. Such questioning processes based on this would be able to provide important “contexts” for education, especially higher education. By that, “education that is related to life” is really directed. Now is the time we need to reconsider this seriously.

From the standpoint of “Amor Mundi and Process Philosophy,” the world where we are living is expressed as a “liquid modernity”, “risk society” and “reflexive modernization”, and a mutually mediated society of individualization and cooperation. This is viewed as a valuable society which should be aimed for. In this paper, I have explained the necessity of contextualization in higher education.